

渡邊典子さんの切実な言葉

歴史を教訓としない政権は被爆者の 苦しみを忘れ、無かったことにしようとしている

私の役目は しっかりと次の世代へ平和を繋ぐこと

2014年08月15日 寄稿 全自交愛媛地本 渡邊典子さんより

8月は命を思う。69年前の8月。二つの原子爆弾はその日を最後に、多くの命を一瞬にしてこの世から亡くし、生きてきた証を消してしまいました。

生き残った人々の苦しみを私たちはどれほど理解できるでしょう。知識で解っていても、想像し自分のこととすることの難しさを感じます。

8月9日、長崎平和式典で語られた被爆者代表城臺さんの「平和への誓い」は、被爆者であるが故の重い言葉が綴られていました。歴史を教訓としない現政権は、被爆者の苦しみを忘れ、なかったことにしようとしているのでしょうか。忘れてなりません。忘れるところから思考停止が始まります。戦争の第1の犠牲者は「真実（知らされない）」そして「文化（言葉や芸術）」だと思います。いま、秘密保護法、集団的自衛権など、法整備が着々と整えられてきています。国民に対し見せない、言わせない、聞かせない時代が再び来ようとし平和を脅かしています。何もせず何も言わず抑圧に抗せずそれでいて自分たちにとって良い社会、良い暮らしを求めることは不可能なことなのです。こんな時代こそ、労働組合が平和運動を進める意味が強く求められていると思います。しかし、私たち労働組合の平和運動は大衆の基盤を持った運動として受け入れられ支えられてきたのでしょうか。憲法をもっと身近なものとするためには、平明な言葉と地道な運動が大切に思います。



労働組合が平和運動をすすめる意味を思い返し、秋の沖縄・福島知事選挙に始まる来年の統一自治体選挙で私たちの意思をはっきり現わすことだと思います。



広島原爆慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから」と書かれています。「過ち」とは一体どんな過ちなのでしょうか。日本人みんなが共通認識をもっているのでしょうか。

長崎では平和のバトンを渡し継いでいる若者たちがいます。戦争体験者は高齢になり、被爆者のみなさんは命がけで語り継ごうとしています。男性は事実を語り、女性は想いを語ります。貴重な体験を直に聞く最後の世代として、私の役目は、しっかりと次の世代へと平和を繋ぐことだと、心に誓った8月でした。